

新潟県新発田市古太田川における 伝統的水利用施設カワドの現代的意義

塩山 祈¹・佐々木 葉²

¹学生会員 早稲田大学大学院修士課程 創造理工学研究科 建設工学専攻
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail:inori.shioyama@ruri.waseda.jp)

²フェロー会員 早稲田大学教授 創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp)

持続可能なまちづくりに取り組む上で、地域資源の価値を明らかにすることは重要である。本研究では、伝統的水利用施設「カワド」が多く見られる新潟県新発田市古太田川を対象として、地域住民に対するインタビュー調査とアンケート調査を実施し、暮らしにおける河川および周辺空間の利用と意識を把握した。その結果、利用実態の時間的変化、年代による経験と認識の違いが明らかとなった。また各人の井戸に比べてカワドは他者と共有され、多様な経験が蓄積する場であることが示され、地域住民の共同意識を支えることが示唆された。

Key Words: 水辺空間, 農村集落, 水利用施設, 地域資源, 古太田川

1. 序論

(1) 背景と目的

新型コロナウイルスによるパンデミックや能登半島地震を契機に、持続可能なまちづくりとは何かが問われている。持続可能なまちづくりを行うためには、行政や民間団体、住民など多様な主体が地域づくりに関わり、重層的につながり合うまちづくりへの参加と連携が必要である。そして、地域固有の自然環境や景観、文化・伝統などの地域資源を活用することも不可欠である¹⁾。

地域資源の中でも、郡上八幡の水屋や伊庭の水路網をはじめとする伝統的な水インフラ施設の価値が再評価されている²⁾。水資源の効率的な活用や、災害時におけるリスク分散の観点、水利用施設の維持管理を通じた地域コミュニティの形成の観点、遺産的価値の観点などから、伝統的な水インフラ施設の現代的意義が示されている。

一方農村集落では、高度経済成長期を経て、インフラ整備によって都市化が進み、少子高齢化、人口減少によって生じる問題が深刻である。特に、農村集落における人口減少によって、インフラ施設の維持管理を担う主体は弱体化し、維持管理がますます困難になっている。そのため、全国の伝統的な水利用施設は失われつつある。

他方、伝統的なインフラが現存する集落も存在する。

長澤ら³⁾は、新潟県福島潟周辺地域を対象として、水路網と集落の変遷と特徴を明らかにした。水路との接続が特徴的な集落として、古太田川周辺集落をあげている。この集落は、水路と平行に立地しており、現在でも水利用施設の「カワド」をはじめとした、水との伝統的な関わりが残っている。

以上を踏まえ、持続的なまちづくりに向けて、農村集落の伝統的な水インフラ施設の現代における意義を明らかにすることは重要である。本研究では、伝統的な水利用施設が現存する新潟県新発田市古太田川を対象として、水辺空間の利用実態とその変遷を整理し、水辺空間に対する住民の認識を把握することで、水辺空間の利用と水辺空間に対する住民の認識の関係を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の方法

本研究では、地域住民に対するインタビュー調査とアンケート調査を実施する。まず2章で対象地、対象集落の概要、地域住民の活動について整理する。次に3章では、調査から得られた結果を整理し水辺空間における行為と変遷を把握する。さらに4章では、インタビュー調査で得られたテキストデータから水辺空間に関する認識を抽出し、そしてカワドと井戸という水利用施設の特徴

をテキスト分析を通して考察する。

(3) 既存研究の整理と本研究の位置づけ

本研究に関連する既存研究として、景観構成要素の変化に注目した文化的景観に関する研究や、歴史的な水辺空間を空間形態・利用・管理の点から分析した研究があげられる。

a) 景観要素の変化に注目した文化的景観に関する研究

2005年に「文化的景観」が文化財の一つとして制度上位置づけられて⁴⁾以来、文化的景観を扱う多くの研究が存在するが、特に景観構成要素の変化を扱う研究として、沢らによる伊庭の水路網を対象にした研究⁵⁾や、南里らによるヨシ原を中心とする土地利用の変遷を扱う研究⁶⁾がある。

b) 水辺空間を空間形態・利用・管理から分析した研究

歴史的な水辺空間を空間形態に注目して分析した研究として、笠ら⁷⁾や鈴木ら⁸⁾の研究がある。さらに、水辺空間に支えられる地域コミュニティに関する研究として、中嶋らによる研究⁹⁾が挙げられる。

c) 本研究の位置づけ

本研究では、水辺空間を住民の「行為」の観点から、農村集落における時代の変遷に伴う水辺空間の変容を明らかにする。それを踏まえて、井戸とカワドという異なる水利用施設に注目し地域住民の認識を把握することで、水利用施設のなかでもカワドの現代的意義を考察する点に特徴がある。

2. 研究対象地の概要

(1) 3集落の概要

対象とする下興野、飯島新田、太田新田の3集落は新潟県新発田市の西部に位置し、標高が周囲よりも2mあまり高い微地形上に位置する(図-1)。集落の中央を古太田川が流れ、古太田川と道路を隔てて住宅が向かい合って立ち並ぶ。

3集落は下興野(成立年代不明)、太田新田(1655年成立)、飯島新田(1657年成立)の順に成立した¹⁰⁾¹¹⁾と推定され、1889年の市町村制の施行により3集落は旧鳥興野村として合併し、1901年に旧佐々木村に合併した。その後1959年に新発田市に編入され¹⁰⁾現在に至る。

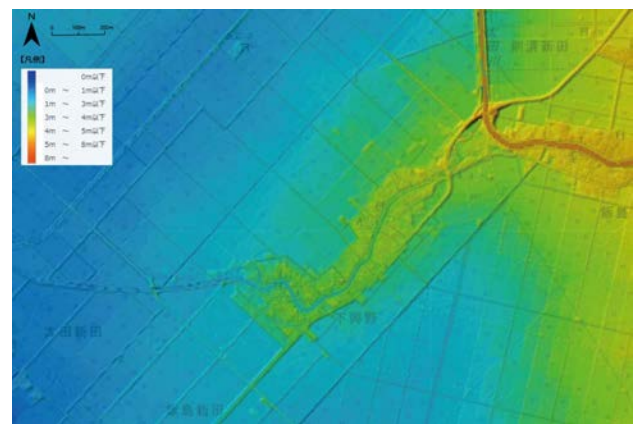


図-1 古太田川周辺の地勢¹²⁾を基に筆者加筆



図-2 古太田川におけるカワドの位置とその様子

2023年11月末現在の世帯数と人口は、下興野が58世帯183名、太田新田が26世帯91名、飯島新田が22世帯54名である¹³⁾。過去30年でいずれの集落においても世帯数に大きな増減は見られないが、下興野集落では人口が急減し、30年前と比較して約3割減少している¹⁴⁾。

産業に関して、対象地周辺では昔から稲作が盛んで、1877年には対象集落のほぼ全ての世帯が農業を営んでいた。しかし次第に農業従事者の数は減少し、現在では3つの集落すべてで人口の1割以下となっている¹⁵⁾。

(2) 古太田川の概要

古太田川は、全長約2km、川幅約2mの河川であり、太田川から下興野頭首工で分流して集落到流れ込み、水田地帯を通過し福島潟に流入する。古太田川には2箇所太田新田の営農者によって管理されている堰があり、水位を調整することができる。飯島新田・太田新田は、古太田川を農業用水として利用しており、この堰から取水し圃場に引き込んでいる。古太田川には、家庭で川の水を利用するための水利用施設「カワド」が各世帯により設置され、対象地には43個存在している(図-2)。また、古太田川の水辺空間は「カワバタ」と呼ばれ、細分化されて集落住民個人の所有地となっている。

(3) 対象地における地域住民の行事と活動の概要

古太田川では現在でも「えざらい」^[註1]や「水神様」^[註2]といった伝統的な行事が行われている。えざらいとは、古太田川の維持管理の一環として、古太田川や親水公園の水草刈りや水辺空間の樹木の伐採などを行う集落仕事である。下興野集落と飯島新田・太田新田集落は別の日にえざらいを行い、下興野集落のえざらいは農林水産省による「多面的機能支払交付金」により支援されている。原則各世帯から家長が参加するが、高齢のため体力が持たないなどの事情により、妻や息子が代わって参加するという例外もある。水神様は毎年12月15日の夕方ごろに行われる年中行事であり、現在でも下興野集落に水神様を実施している世帯がある。そこでは、大根の胡麻和え、豆腐汁、炊き込みご飯を椿の葉の上に盛り、ろうそくと共にカワドに供えた後、古太田川に御神酒を注ぎ、ししゃもを流す^[註3]。その後、自宅に戻りお供え物と同じ料理を家族で食べる。かつては子ども古太田川で溺れるなど水難事故が多かったため、水難事故に遭わないよ

うに、また水が使えることに感謝して祈願していた。

さらに対象地では、2000年代初頭は古太田川の自然環境に関する住民活動が、最近では古太田川の維持管理に関する活動が見られる。2004年度に佐々木土地改良区によって実施された「子どもたちの農業農村体験学習事業(水辺環境学習タイプ)」は、地元小学校の児童を対象とし、古太田川の植生調査、水棲生物調査を行い、古太田川に整備予定の公園のイメージ図を作成した¹⁶⁾。

2022年7月に、地域住民を中心として「憩いの川辺親水歴史遺構の保存に関する(求める)陳情書」が新発田市議会に提出された¹⁷⁾。この陳情書では「川を挟んで両側に道路と家並みが現存する景観」が珍しいとして、集落の高齢化によって河川の維持管理が困難になることを理由に、「川岸の護岸改修」「浚渫」「堰止め改修」を求めている。

3. 水辺空間の利用実態と変遷

(1) 調査概要

本研究ではインタビュー調査とアンケート調査を実施した。調査の概要を表-1に示す。はじめに、集落の行事や水利用の実態を把握するために、2023年7月から9月にかけて住民を対象にインタビュー調査を行った。また、井戸の所有と利用の実態等を把握することを目的として2023年9月に各世帯を対象にアンケート調査を実施した。アンケートは100部(下興野:50部、太田・飯島新田:50部)配布し、回収数は28部(下興野:22部、太田・飯島新田:6部)、回収率は28%であった。

(2) 水辺空間の利用実態

地域住民に対するインタビュー調査によって得られた内容を、カワバタの利用、水辺空間における行為として、アンケート調査によって得られた結果を井戸の所有状況と利用に注目してそれぞれ整理する。

a) カワバタの利用

対象集落では、古太田川に面した空間を「カワバタ」と呼ぶが、かつてのカワバタには竹、ハンノキ、スギが植えられ、用材として利用された。竹は収穫した稲を束ねて干す「ハサ場」の横部材として利用され、ハンノキやスギは焚き木や建築用材として用いられていた。さら

表-1 インタビュー調査の概要

	日程	方法	対象	調査内容
インタビュー調査	2023年7月~9月(計8日間)	各住民宅を訪問	下興野集落在住の住民23名	カワドの利用、カワバタの利用、井戸の利用、集落の行事などの事実関係の確認
アンケート調査	2023年9月1日~9月24日	自治会長が配布 班長が回収、メールで送信	下興野の50世帯	回答者年代、井戸の所有の有無、過去と現在の井戸の用途
		自治会長が配布 集会場に回収箱を設置、メールで送信	太田新田・飯島新田の50世帯	

にカワバタは、川岸に堆積した泥をあげる「ゴミ上げ場」としても機能し、あげられた泥は田んぼの堆肥として活用された。現在ではこれらの利用法は見られず、用材として植えられていたハンノキや杉をはじめとする河畔林は、維持管理の負担から伐採されていく傾向にある。

b) 井戸の所有状況と利用

アンケート調査の結果から、井戸の所有について、かつては23世帯が井戸を所有していたが、現在も所有しているのは4世帯のみである。またアンケートの自由記述より、1960年代頃までの井戸の用途として、「飲用」、「風呂の水」が6件、「野菜を洗う」が4件、「食器を洗う」が3件、「洗濯」が2件であり、1960年代頃は井戸水は生活用水として広く利用されていたことが明らかになった。

c) 水辺空間における行為

古太田川で行われてきた行為について、インタビュー回答者の年代と対応させて、回答者自身が経験したものを○、他人の経験を見聞きしたものを△、回答者が経験したことがないと言及されたものを×で示した(表-2)。なお、インタビュー調査において言及されなかった行為は空欄として表した。「飲料」「米をとぐ」「身支度」「洗濯」「水汲み」「泳ぐ」「鍋や釜を洗う」「野菜を洗う」「農機具を洗う」「除雪」「いかだをつくる」

「魚を捕る」「年中行事『水神様』」の計13種類の行為が確認された。表-3においてそれぞれの行為の概要を示す。「水汲み」や「洗濯」といった生活用水としての利用は60代以上の世代で経験されている一方、「いかだをつくる」という遊びとしての行為は40代を中心に経験されている。また、「魚を捕る」という行為は40代以上の幅広い世代で確認された。さらに、現在の川水の用途として「野菜を洗う」「農機具を洗う」「魚を捕る」「除雪」「水神様」が言及された。特に「除雪」は、多くの住民が現在も行っており、集落の中心を川が流れるという地理的特性の長所として認識されている様子が伺えた。

(3) 水辺空間の利用の変遷

古太田川で行われてきた行為の変遷を、対象地周辺のインフラの整備事業とともに時系列で整理した(図-3)。

1960年代以前は、古太田川は飲料水や食材の洗浄など生活用水として幅広く利用され、川で泳ぐ、魚を捕るなど遊びの空間としても活用されていた。1960年代後半には上水道の整備事業をはじめとするインフラの整備が進み、徐々に生活用水としての利用が減少した。一方、その後もしかだをつくる、魚を捕るなど遊ぶ空間として利用されていたことが明らかになった。

表-2 回答者の年代と水辺空間の利用

回答者No.	回答者の年代	水利用								遊び				行事 水神様
		飲料	米をとぐ	身支度	洗濯	水汲み	鍋や釜を洗う	野菜を洗う	農機具を洗う	除雪	泳ぐ	いかだをつくる	魚を捕る	
No.2	80		○			○					○		○	○
No.3		○	○			○							○	○
No.5	70				○	○				○		○		○
No.8			○	○		○	○		○	○				○
No.10					○		○		○	○				○
No.9	60										○		○	○
No.17			△			○				○			○	×
No.22									○	×			○	×
No.23					△	○			○	○	×			○
No.11	50			△									○	×
No.6	40										×	○	○	×
No.13									○	×	○	○	○	×
No.14									○	×	○	○	○	×
No.16										○	○	○	○	×

【凡例】○：経験あり、△：他人の経験を見聞きした、×：経験なし

表-3 水辺空間の行為の概要

行為名	行為の概要
飲料	この行為は1人のみが語っていた。この世帯の井戸水の水質が悪く、飲料として適さなかったため、川の水を飲んでいただけの可能性はある。
米をとぐ	川がきれいだったころの行為として語られた。60年以上前に行われてきたと推察される。
身支度	70年ほど前まで、歯を磨く、顔を洗うなどの身支度を川で行っていた。
洗濯	60年ほど前まで、川で洗濯をしていたと推察される。古太田川では比較的綺麗なものを洗い、集落内の他の水路で汚れ物を使うという使い分けがされていた。
水汲み	主に風呂を沸かすために川から水を汲んでいた。この行為は60代までが経験し、かつ自身の体験として多くの発言が得られた。 水汲みは子どもの仕事であり、回答者の大半が経験したことがあるため、多く言及されたのだと考えられる。
泳ぐ	60代以上の住民の大半が言及していたのに対し、50代以下では経験したことがない人がほとんどであった。 これは、かつて下興野集落開発センターの前の場所が学校指定の遊泳場となっていたが、1969年の佐々木小学校のプール完成に伴い、川で泳ぐ機会が減少したためと推察される。
鍋や釜を洗う	集落仕事の「味噌煮釜洗い」にも見られるように、鍋や釜をカワドで洗うということが頻りに行われていた。 かつては囲炉裏を利用していたため、鍋や釜にすすが付くので定期的に川で洗っていた。
いかだをつくる	60代以下の若い世代を中心としてこの行為が経験された。
魚を捕る	ほぼ全ての世代で言及された。捕れる魚類は時代によって異なり、1960年代以前はオイカワやヒゴロ、フナ、ヤツメウナギ、カワエビ、ザリガニなどが捕れ、捕れた魚は家の囲炉裏で焼いて食べることがあった。1970年代以降はザリガニやイトヨ、フナ、タナゴなどが捕れた。
野菜を洗う	現在でも、自分の畑で獲れた野菜の泥を簡単に落とすため、野菜を洗うという行為が行われている。
農機具を洗う	現在でも行われており、農作業で使用し泥のついた鎌などをカワドで洗っている。
除雪	近年の水辺空間の利用として言及された。特に40代以下の若い世代で、古太田川は除雪ができて便利だと認識されている。

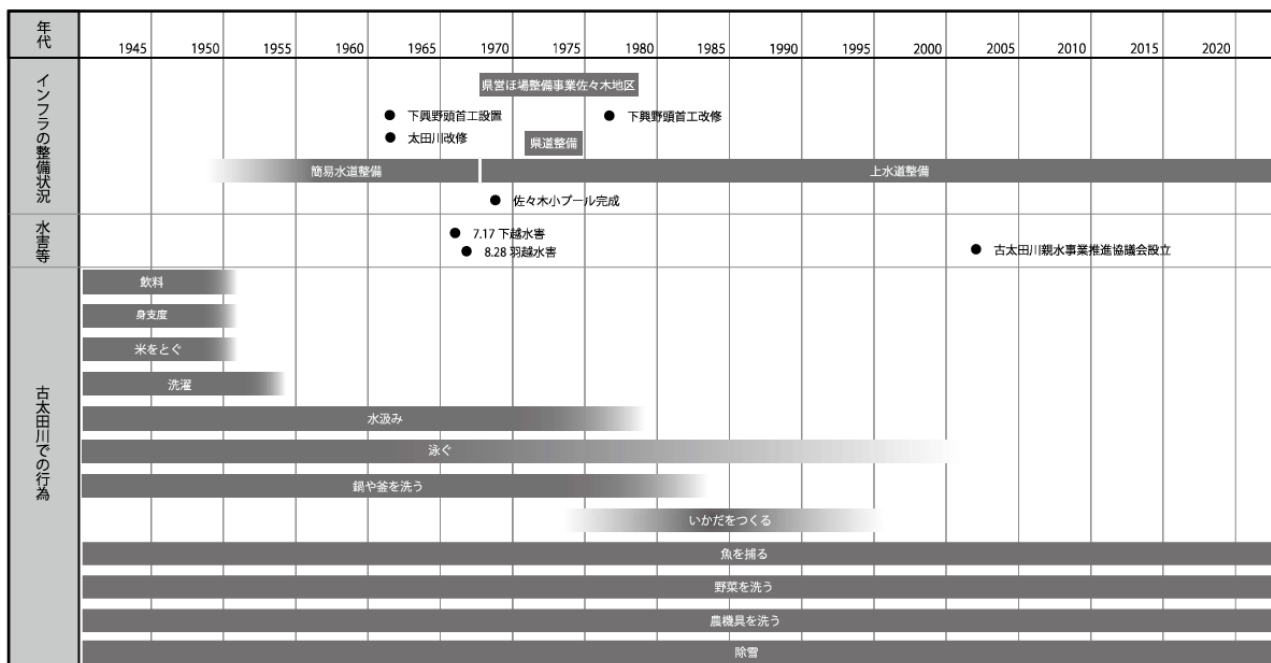


図-3 対象集落におけるインフラ整備と古太田川の行為の変遷

(4) 水辺空間の利用の変化に関する考察

前節では古太田川での行為の変遷を明らかにしたが、行為の変化が生じた要因について考察する。

a) 水道事業の実施

古太田川は、飲み水や食材の洗浄、洗濯、風呂の水汲みなど生活用水として幅広く利用されていたが、1950年代ごろからそのような行為は徐々に古太田川で見られなくなった。この変化は、集落内の井戸を水源とした簡易水道や、1969年の上水道の整備によって水道が各家庭に設置され、自宅で綺麗な水を簡単に得ることができるようになったからだと推測される。

b) 小学校のプールの完成

1969年に佐々木小学校にプールが完成したが、これによって川で泳ぐという機会が減少したと考えられる。プールが完成する以前は、古太田川は下興野集落開発センターの前付近が小学校指定の遊泳場となっており、保護者や小学校が管理をしていた。そのため小学生は日頃から川で泳ぐという経験をしていたため、川に入ることに抵抗はなかったと推察される。

c) 農家の減少

古太田かつて対象地域は、集落のほぼ全戸が農家であったことをふまえると、古太田川で行われてきた集落仕事や年中行事、野菜や農機具を洗うといった行為は、農業という生業に密接に結びついて存在していた行為と捉えることができる。そのため、集落内での農業従事者の減少にしたがって、このような行為が見られなくなっていったと考えられる。

4. 水辺空間に対する住民の認識

(1) 回答者の年代と水辺空間への認識の特徴

住民が抱く古太田川への認識を明らかにすることを目的として、インタビュー調査によって得られた23名の発言データから該当する発言を抽出した。

結果として、「ものすごい綺麗だったんですよ。」(No.1)「*田んぼの水を通すだけじゃなくて、生活にも使っている大事な水だった。*」(No.3)など、70代以上の世代はかつての川は生活に必要な不可欠な存在だとして好印象を抱くことが明らかになった。一方、現在の川の状態に対しては「*だんだん水質が悪くなって*」(No.3)「*今なんかさ、日常生活じゃとてもじゃねえが(川の水は使えない)*」(No.10)のように悪印象を抱いていた。

60代以下の世代は、「*あんまりそれ(川に)執着ねえ。何とも思わねえんだよな。*」(No.9)「*川なんか、月に一回見るか見ないかくらい。*」(No.13)という発言が得られ、川に対して無関心な様子が見られた。

(2) カワドと井戸に関する住民の認識の特徴

住民の水利用施設に関する認識の傾向を明らかにすることを目的として、前述のインタビュー調査のうち、井戸とカワドについての発言を得られたNo.3, 8, 9, 10, 11, 17, 22, 23の8名の発言データを用いてコーディングを行った。

コーディングの際は、テーマ中心の質的テキスト分析の方法¹⁸⁾に則り、住民が語った内容の要素毎にラベルをつけ、そのラベルをもとに、帰納的にカテゴリーを生成した。生成されたカテゴリーと、それに対応する発言デ

表-4 カワドと井戸に関する発言データとカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ	井戸		カワド	
		データ数	一部データ	データ数	一部データ
空間	集落全体	9	でも、水は出るけれども、いい水は出ないね、この集落は、	9	川の水きれいなもんだから、
	集落内のある場所	7	あそこんこ、豆腐屋やったら、きれいな水だったしき。	7	昔は、あの公民館のあの前のあたりが、この地域の水泳できる場所って決めて、あそこで泳いだんだわね。
	その他	1	小屋の中にはポンプのいろんな機械があるからね。	0	-
経験	自分	14	例えば、スイカを冷やしたりとか、なんかトマトを冷やしたりとか	24	川から水を汲んで入れて、バケツで一生懸命入れて、それで（お風呂を）焚いて入ったの。
	家族	6	「あそこ冷たいから入れよう」なんて言って、たいいのものは入れてたね。	11	休みになると、ぼあちゃんなんか、鍋の焦げ付いたところを洗うとかね。
	集団	4	だんだん水質が悪くなってきて、また家庭排水も流すようになってきてから、川水は使えないようになって、それでそれぞれが井戸を掘ったわけ。	16	あそこんちも、ここんちも、そんなんしてね。（風呂に）入ってたんだよ。
	その他	0	-	0	-
	井戸	14	井戸もそういう、粗末にできなかった。	0	-
物	井戸水	8	全部上水道に切り替わったから、井戸水はほとんど使ってない。	0	-
	カワド	0	-	8	階段もほら、階段じゃなくなるところもいっぱいある
	その他	2	（井戸のポンプの）その台のところがすごく冷たくて、今の冷蔵庫代わり。	2	昔の風呂ってね、木の風呂だったの、想像もつかないだろうけど。

ータを表-4 に示す。発言内容は「空間」「経験」「物」の3つに大別することができ、「空間」は集落全体に関するもの、集落内のある特定の場所を指すもの、それ以外の3つに分けられた。「経験」に関しては、自分の経験、自分や家族の経験、近隣の人の経験の3つに大別され、それ以外の人の経験に関する発言データは得られなかった。「物」は、井戸、井戸水、カワド、それ以外の4つに分けられた。

井戸とカワドに関する発言データのそれぞれについて、カテゴリ別に分類し単純集計した結果を図-5 に示す。

井戸に関する発言では、「井戸」や「井戸水」といった「物」に関する発言の占める割合が大きいことが特徴である。井戸水は、かつて各家庭で水を漉して飲み水として利用されており、簡易水道の水源としても活用されていたという背景から、住民が井戸を、水を利用する「物」として認識していたことが明らかになった。

一方でカワドに関する発言では、「経験」というメインカテゴリが発言全体の約7割を占めていることが特徴である。「経験」のメインカテゴリの中でも、「自分の経験」と「集団の経験」が多く語られた。これは、住宅の敷地内にある井戸と異なり、カワドは地域住民が日常的に往来する水辺空間に設置されているため、家族だけでなく近所の人カワドを利用して様子頻繁に目にしていたからだと考えられる。

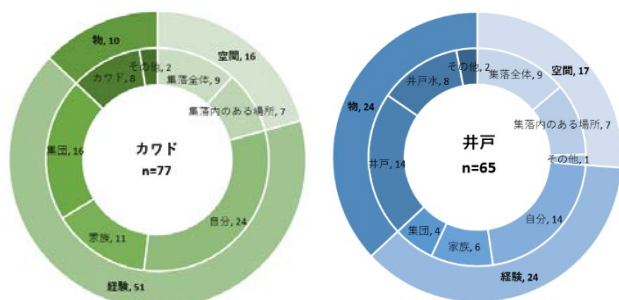


図-5 カワドと井戸に関する発言の対象

5. 結語

(1) 得られた結果

本研究では、伝統的な水利用施設が現存する新潟県新発田市古太田川を対象として、水辺空間の利用実態と変遷を把握し、井戸とカワドという2つの水利用施設に対する住民の認識を明らかにした。

水辺空間における行為の変遷に注目すると、かつての水辺空間は日常生活の基盤となる空間であり、多目的な機能を有していたが、1960年代から行われた古太田川周辺の上水道整備や頭首工整備をはじめとするインフラ整備事業の実施に伴って、地域住民にとって古太田川は生活用水としての役割を徐々に失い、「いかだをつくる」「魚を捕る」といった遊び空間へと変容していった。

また、住民の水辺空間に対する認識に関して、70代以上の住民はかつての川に好印象を抱き、現在の川には悪印象を抱くが、60代以下の住民は川に対して関心がないことが明らかになった。さらに、カワドと井戸に関する発言を比較することで、カワドは他者の存在を許容する公共的な空間であり、家族や近所の人など他者の多様な経験が蓄積される場であることが明らかになった。

(2) カワドの現代的意義に関する考察

本節では、住民と伝統的な水利用施設であるカワドの関係から、まちづくりにおけるカワドの現代的意義について考察する。1960年代から、古太田川は日常生活を支える基盤としての空間から遊びの空間として変容していったことが明らかになった。この変化によって、日常生活の場が水辺空間から住居空間へと収容され、住民同士が個として閉じてしまい、川を利用する機会が減少することで川に対して無関心になっていくことが示唆された。

一方でカワドは、「屋敷」^[注4]にある井戸とは異なり、他者の行為を直接認識できる空間に存在し、カワドには他者の多様な経験が蓄積される。そのため、カワドが住民の水辺空間に対する認識の深化に寄与することが示唆

された。

以上を踏まえると、カワドは、地縁により結びつき、風土に根差した共同意識を有する人々のつながりを形成する場として機能すると考えられる。古太田川周辺集落では、都市の周辺化が進み、農業従事者が減少しつづけている。それに伴い、集落の社会的紐帯を支えてきた農村社会としての構造が解体され、地域住民の共同性が失われつつあった。少子高齢化をはじめとする地域における課題を解決するためには再び住民の共同意識を取り戻す必要があり、そのひとつのツールとしてカワドを活用することは重要である。

筆者らは、2023年10月に下興野集落の住民とともに新たなカワドを設置した。その後、集落のある世帯がカワドを修復し、さらに地元の小学校でもカワドに親しむ総合学習の計画が立てられており、カワドや水辺空間に対する地域住民の関心も高まりつつある。カワドを利用した実践活動やその影響は今後の課題としたい。

謝辞：本研究はJSPS 科研費 22H03894 の助成を受けて行われたものである。また調査にご協力いただいた下興野・太田新田・飯島新田集落のみなさまに心より感謝申し上げます。

NOTES

- 注1) 対象集落では「えざらい」と呼ばれ、下興野自治会が作成した募集チラシには「江渡」「えざらい」のどちらの表記も見られる。
- 注2) 井戸に供える水神様と区別して、古太田川に祈願することを特に「川水神様」と呼ぶことがある。
- 注3) 水神様のお供え物は、各家庭で少しずつ異なっていたことが分かっており、お供え物の魚もかつては古太田川で獲れた生魚だったという。
- 注4) 対象地において「屋敷」という言葉は、住宅などの建築物自体ではなく、生垣や石垣で囲まれた住居を中心とした空間を指す。

REFERENCES

- 1) 国土交通省：第三次国土形成計画（全国計画），国土交通省，p.10，2023。
- 2) 林倫子，森彩乃，大窪健之，金度源：大阪府交野市倉治における古式水道「取り水」の歴史と利用実態，土木学会論文集 D1（景観・デザイン），Vol.77，No.1，pp.99-109，2021。
- 3) 長澤歩，桐原涼，小澤広直，佐々木葉：新潟県福島潟周辺地域の水路網および集落の変遷と特徴，土木計画学研

- 究・講演集，Vol.66，2022。
- 4) 文化庁：文化的景観の保護のしくみ，文化庁文化財第二課，2024。
- 5) 沢一馬，山口敬太，久保田善明，川崎雅史：水郷集落における文化的景観の持続性—伊庭における水路網の復元と水利用の変容—，土木学会論文集 D1（景観・デザイン），Vol.69，No.1，pp.42-53，2013。
- 6) 南里美緒，横張真，落合基継：近江八幡の水郷景観におけるヨシ原の変遷とその文化的景観としての保全策，ランドスケープ研究，Vol.72，No.5，pp.731-734，2009。
- 7) 笠真希，小熊久美子，窪田亜矢：歴史的住環境での持続可能な水システムのタイプ化の方法論の開発—水システムの空間形態・利用管理・水質，及び経年変化に着目して—，住総研研究論文集，No.38，pp.257-268，2011。
- 8) 鈴木尚美子，畔柳昭雄：水網都市におけるオープンスペースの空間特性に関する研究，ランドスケープ研究，Vol.68，No.5，2005。
- 9) 中嶋伸恵，田中尚人，秋山孝正：水辺空間を基盤とした地域コミュニティの形成に関する研究，土木学会論文集 D，Vol.64，No.2，pp.168-178，2008。
- 10) 佐々木中学校歴史研究部：佐々木村郷土史，佐々木中学校歴史研究部，1977。
- 11) 新発田市史編纂委員会：新発田市史資料第 5 巻民俗（上），新発田市史刊行事務局，1972。
- 12) 国土地理院：地理院地図（最終閲覧日：2024年8月17日）
- 13) 新発田市：住民基本台帳人口，世帯数，2023年11月現在
- 14) 総務省統計局：国勢調査（1995年-2020年）小地域集計・男女別人口及び世帯数-町丁・字等（最終閲覧日：2024年8月17日）
- 15) 総務省統計局：国勢調査（1995年-2020年）小地域集計・産業（大分類），男女別 15歳以上就業者数-町丁・字等（最終閲覧日：2024年8月17日）
- 16) 新発田市佐々木土地改良区：古太田川夢の公園 ホテル舞う未来像を描く，2005。
- 17) 新発田市議会：陳情第 2 号 憩いの川辺親水歴史川遺構の保存に関する（求める）陳情書，2022。（最終閲覧日：2024年8月17日）
- 18) Kuckartz, U. 著・佐藤郁哉（訳）：質的テキスト分析法—基本原理・分析技法・ソフトウェア，pp.98-123，新曜社，2018。